様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２０２４２

研究課題名（和文）中国朝鮮族日本語学習者の言語応用能力と言語意識に関する質的研究

研究課題名（英文）the qualitative research on language awareness and language application ability of japanese language learner from the korean minority in china.

研究代表者
鄭　京姫（CHUNG, KYUNGHEE）

早稲田大学・付置研究所・その他

研究者番号：７０５９８７６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では,「母語」「母国語」「外国語」をめぐる中国朝鮮民族日本語学習者の言語意識をライフヒストリーインタビューから聞き,考察を行ったものである。そこには,3つの言語に対する葛藤やアイデンティティの揺れが語られていた。しかし,その揺れを乗り越え,そのどれも「完璧」とは言えない互いの言語を補い合いながら生きる姿も見られた。さらに,言語の境界を生きること,「自分」にとって意味のある言語で生きることの重要性が語られ,ことばをアイデンティティの観点から捉え直すことの必要性が示唆された。また、自らが変化していく主体であり、他者とかかわり、理解しあえることができたと捉えていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：in this study,discusses the language awareness of japanese language learners of ethnic koreans in china regarding 'mother tongue','native language' and 'foreign language',which are found from life-history interviews.the subjects talked about the conflict of uncertain identity for the three language.however,it was evident that the subjects overcame the uncertainty and their 'non-perfect'languages are complimenting each other.furthermore, the subjects also discussed living on the 'boundaries of language',and the importance of using the language that is meaningful to 'themselves'. this suggests the need for re-capturing the language from the perspective of identity.
in the analysis,it became clear that the learner eventually came to think, through the japanese language, their was able to develop a relationship of mutual understanding with others.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：複言語能力　言語意識教育　多文化共生　アイデンティティ　多言語社会　言語教育理解　異文化間教育　年少者教育

１．研究開始当初の背景

本研究は、言語能力を生きることという文脈で捉え、「母語」「母国語」「外国語」という「言語の境界」を乗り越えることの意味と、言語教育をアイデンティティ形成の観点から捉えなおすことの重要性を明らかにすることを目的としたものである。特に「朝鮮語」「中国語」「日本語」という３つの言語を持っている中国朝鮮族日本語学習者の言語意識と言語応用能力に関するライフヒストリーにより、固定的に捉えられているアイデンティティから流動的で多面的な観点を考察する。本研究を通して、多言語化が進行する日本語学習者への支援のありかを考えるきっかけになると同時に,日本語教育の文脈で複言語主義の課題と展開の基盤となる。

近年日本語教育においては、言語能力観から言語教育のあり方を考えることの重要性が述べられている。同時に、複数の言語において個人が持つあらゆる言語的な力が活かされる複合的な力を重視するヨーロッパの文脈での複言語主義が注目を浴びている。日本語教育におけるこのような動きは、多様な言語背景を持つ学習者の増加に伴い不可欠なことであると考えられる。だがその一方、日本語学習者の多様な言語背景に目を向ける必要性を課題としながらも、育成させるべき「能力」とは「コミュニケーション能力」であるとされており、日本語学習者個々人の能力観は重視されていないのも現状である。それはつまり、日本語教育における「日本語」とは「外国語」という枠で捉えられているからであろう。

よって、日本語学習者の言語能力は各々の中にあり、したがって能力を育成することではなく、生きることという文脈で捉える必要があると考えた。特に、「朝鮮語」「中国語」「日本語」という３つの言語を持っている中国朝鮮族日本語学習者は複数の言語能力を持っているにも関わらず、固定されたアイデンティティで捉えられていることが見られた。中国朝鮮族に関する研究はアイデンティティの葛藤に焦点を当てたものが多いと思われる。関連文献にも、「あなたは自分を何人だと思いますか」という質問に対して「朝鮮人対中国人」が提示されている。しかし、個人の中にある複数,かつ複合的なアイデンティティが彼らにはきちんと反映されていなく、アイデンティティと民族が混同されていると思われる。むろん、多かれ少なかれアイデンティティの葛藤に悩む体験をしていると思われる。しかし、果たして,彼らを朝鮮民族としてのエスニック・アイデンティティと中国国民としてのナショナル・アイデンティティという二元的な帰属意識の中で選択に迫られる存在としてのみ、捉えていいのかという疑問を持つ。言語とアイデンティティの関係を固定したものではなく、複合的で流動的なものであると捉えると共に、「母語」「母国語」「外国語」といった「言語の境界」を別個にするのではなく、「生きること」という視点で個々の能力を支える「ことば」の意味と、アイデンティティ形成に関わる「ことば」の重要性を明らかにする。

２．研究の目的

本研究は、言語能力を生きることという文脈で捉え、「母語」「母国語」「外国語」という「言語の境界」を乗り越えることの意味と、言語教育をアイデンティティ形成の観点から捉えなおすことの重要性を明らかにすることを目的としている。

特に「朝鮮語」「中国語」「日本語」という３つの言語を持っている中国朝鮮族日本語学習者の言語意識と言語応用能力に関するライフヒストリーにより、固定的に捉えられているアイデンティティから流動的で多面的な観点を考察する。本研究を通して、多言語化が進行する日本語学習者への支援のありかを考えるきっかけになると同時に、日本語教育の文脈で複言語主義の課題と展開の基盤となる。

本研究の目的は以下の三点である。

１）中国朝鮮族日本語学習者に関する研究がどのように行われているかを関連文献より概観し、「母語」「母国語」「外国語」といった言語の境界を日本語教育においてはどのように捉えているかを関連論文から調べる。さらに、言語をアイデンティティの観点から捉えることの重要性を縦断的な文献調査を行いながら,理論面における基盤を構築する。

２）中国国内、および日本で在住している中国朝鮮族日本語学習者とのインタビュー調査により学習者各々の言語生活を始め、「朝鮮語」「中国語」「日本語」をどのように運用し意識しているか、自身の言語能力をどのように捉えているかを明らかにし、言語能力の多面的な把握を行う。

３）１、２の結果から,「母語」「母国語」「外国語」といった「言語の境界生きる」ことの意味を明らかにする。さらに、個々の能力を支える「ことば」とアイデンティティ形成に関わる「ことば」の意義と可能性について論じる。

３．研究の方法

１）文献調査では、中国朝鮮族日本語学習者に関する研究がどのように行われているかを概観し、「母語」「母国語」「外国語」といった言語の境界を日本語教育においてはどのように捉えているかを関連論文から調べる。さらに,言語をアイデンティティの観点から捉えることの重要性を縦断的な文献調査を行い、理論面の基盤を構築する。

２）インタビュー調査では、言語使用と言語応用能力の実態を把握し言語能力の多面

的な把握を行う。さらに 3 つの言語を巡る言語意識から能力観を支える「ことば」の意味とアイデンティティ形成に関わる「ことば」とはいかなるものなのかを明らかにする。そのため、ライフヒストリーインタビュー法を用い、「日本語人生」の物語を聴く。日本語を学ぶきっかけを始め、どのように学習し、その中で何が起きたかの語りにより言語に対する意識を把握することができる。

インタビュー調査、分析・考察だが、初年度は、中国の大学で日本語を専攻する中国朝鮮族日本語学習者とインタビューを行った。主に、中国の延辺に位置する大学である。研究の目的およびインタビューの内容を述べ、研究協力を行った。出身地区・年齢・性別を問わず、1 回に 1 時間から 2 時間程度のインタビューを 20 名に聞き取り調査をした。インタビューの内容は,「自身の複数言語能力をどのように考えているのか、どのように応用しているのか、また、複数の言語を使用する中で日本語をどのように位置づけているのか」等を中心に、ライフヒストリーインタビュー法を用い、日本語学習者の「日本語人生」を通じ、包括的に聞いた。なお、調査２年目には、日本国内、韓国の国内に在住している中国朝鮮族日本語学習者にインタビュー同様のインタビューを行った。

分析に使用するデータは、ＩＣレコーダーで録音したインタビューを書き起こししたもの、およびのフィールドノーツを使用した。分析方法は,「ストーリー自体を調査の対象として扱う特徴があり、単に、言語によって示された内容を見るのではなく、語りをなるべく切り刻まずに、語りの流れや全体的な形を大事にしながら、ナラティブの時間的な進行という文脈で捉えられている」というナラティブ分析を用いた。

４．研究成果

１）言語意識と言語能力、そして自己評価の相関性

「母語」とは、本人が「母語」だと見なしている言語であり、複数でも可能であることが「母語をどのように捉えているか」という調査により明らかになった。つまり、自分が言語をどのように意識し、考えるか、または自分の言語能力に対してのきづきによってそれぞれが自分のことばを育んでいくことが重要であることが示唆された。人は自分が持っている言語をどのように捉えるかによって自分の評価基準をあげる傾向が見られた。それは理想とする自己を思い浮かべ、こうありたい自己像を確立していくことであり、日本語を通じて能力への可能性の発見でもあることが明らかになった。

２）言語教育とアイデンティティの関係

人間は言語で生きている。言語で生きる自分がいる。自分において新たな言語が生まれても来るし、自分によって生きられる言語もある。「自分」を抜きにしては語られない言語を誰もが持っている。だからこそその言語は「自分のもの」でなければならない。そのためにも言語とアイデンティティの関係を固定したものではなく、複合的で流動的なものであると捉えると共に、「母語」「母国語」「外国語」といった「言語の境界」を別個にするのではなく、「生きること」という視点で日本語学習者個々人の能力を支える「ことば」の意味とアイデンティティ形成に関わる「ことば」とはいかなるものなのかが明らかになった。つまり「言語能力」とは、ある言語ができる、できないといった領域を超え、自分の可能性であり、自分らしく生きる「力」につながると共に、言語教育とアイデンティティ形成とも関わっていた。自分の中で自覚的かつ複合的に育てられる言語を通じて、日本語学習者個々人が持つ言語レパートリーを生涯にわたって発展させることができる「能力」とは何かが明らかになり、個々の能力を支え、アイデンティティ形成に関わる「ことば」教育の意義と可能性が導かれた。

３）多言語多文化社会への提言

本研究を通じて、多言語化が進行する日本語学習者への支援のあり方への提言ができる。本研究は帰国子女と呼ばれる学習者、親の日本定住によりニューカーマーとなった子ども、片親が日本人ではないハイブリットな家庭で育った人などさまざまな言語背景を持つ学習者が増加している今日の日本語教育において、「外国語のための/外国人のための日本語教育」から、「自分の日本語教育学」へ移行していく意味が示唆された。つまり、日本語教育における複言語主義の課題と展開に本研究は重要な基盤となったと言えよう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

① 鄭京姫、誰が母語を決めるのかー延辺における中国朝鮮族日本語学習者の言語意識に関する調査を手がかりに」、韓日語文論集、18 巻、2014、10 項
② 鄭京姫、言語教育はなぜアイデンティティを問題にしなければならないのか―日本語教育と「日本語人生」：ことばとアイデンティティについての私論、言語教育とアイデンティティ私はどのような教育実践を目指すのか、2013 、pp.218–254.

〔学会発表〕（計　８　件）

① えんどうゆうこ・鄭京姫・福村真紀子・ローマンパシュカ・佐藤貴仁・佐藤正則，「J-LIFE」：人生の物語に私たちが見出す意味」言語文化教育研究会研究集会大会、2014 年 3 月 15 日（於・早稲田大学）（パネル発表）
② 鄭京姫、なぜライフに関わる研究なのか―「日本語人生」を語る場はどういう場であったのか、J-LIFE 研究会、2014 年２月１日（於・早稲田大学）（講演）
③ 鄭京姫、言語の意味を物語るー忘れ去られた言語から歩み寄ることばへ、第 18 回言語文化教育研究会、2013 年 12 月 13 日（於・徳山大学）（口頭発表）
④ 鄭京姫、誰が母語を決めるのかー延辺における中国朝鮮族日本語学習者の言語意識に関する調査を手がかりに、第 19 回韓日日語日文学会、2013 年 9 月 28 日（(於・韓国、釜山外国語大学）口頭発表）
⑤ 鄭京姫、日本語教育における能力と自己評価の意味–越境する中国朝鮮族日本語学習者の言語意識から(Meaning of "living as an ordinary person":From the story of a Japanese learner who crossed the ocean as an adopted child.)、カナダ日本語教育振興会、口頭発表、2013 年 8 月 22 日(於・カナダ、トロント大学）（口頭発表）
⑥ 鄭京姫、自分の居場所からありたい自分像を描いていく〈わたし〉の物語、第 12 回言語文化教育研究会、2013 年 3 月 8 日（於・イタリア，ベネツィアカ・フォスカリ大学）（口頭発表）
⑦ 鄭京姫、自分の可能性へつなげていく「ことばの教育」へ―多様な言語背景を持つ一人の日本語学習者が語る言語意識の考察より、第 2 複言語・複文化主義とアイデンティティ研究会 2012 年 11 月 15 日（於・秋田大学），（招待講演）
⑧ 鄭京姫、私はどのような教育実践をめざすのか ― 自分の日本語を日本語教育学でどのように評価できるか，という問いに変えて、第 10 回言語文化教育研究会、2012 年 3 月 3 日（於・フランス，パリ日本文化会館）（口頭発表）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
（　　）

研究者番号：

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：